FOREFRONT 2020年1月 No.69
インタラックグループ・学校教育便り　フォアフロント

発行：株式会社リンク・インタラック
担当：事業統括部　商品開発ユニット
住所：東京都中央区銀座6-10-1
TEL：03-6779-9460　FAX：03-6779-9475　E-mail：marketing@interac.co.jp

英語教育の新時代に向けて

特別対談　向後秀明先生 × 中嶋洋一先生

2020年度より小学校で新学習指導要領が全面実施となります。5・6年生で「外国語」が正式教科となり、中学校英語との接続を見据えた取り組みにも関心が高まっています。元文部科学省教科調査官で、現在、敬愛大学教授の向後秀明先生と、関西外国語大学教授の中嶋洋一先生に、今後の小学校と中学校の英語教育の方向性について対談いただきました。公立学校の教員、また、行政や研究所、大学でのご経験、そして共著の執筆と、共通項が多いお二人。実践と研究の両面で日本の英語教育を支えて来られた立場から、存分に語っていただきました。

小学校英語の充実は、中学校と手を携えて

――2020年度、新学習指導要領の実施に伴い、小学校で教科としての「外国語」がいよいよ始まります。どのようなところに留意すべきでしょうか。

中嶋　小学校で英語が教科化されるにあたり、私は中学校区を1つのチームと考えて、小学校と中学校がしっかり向き合い、協力する体制を作っていかなければならないと考えています。例えば、中学校のどれだけの先生が小学校英語の「We Can !」の中身をご存知でしょうか。また、小学校の先生も、中学校で今どのような授業が行われているのかをご存知でしょうか。小学校はコミュニケーション、中学校は高校受験に向けた勉強と、互いが別々のゴールを目指していてはいけないと思います。小学校を卒業する時に、中学校の入口として子どもたちが獲得しておくべきことは何か、中学校区の小学校と中学校の先生方が頭の中に同じ絵を描いておく必要があります。

特に小学校では言葉に対する関心を育てたいですね。自分の伝えたいことが伝わったかは、相手の反応により確かめられるものです。相手の話を自分の中に落とし込んで、本当に理解したことを今度は自分から相手に伝える、こうしたやり取りを通して理解が深まっていくという体験を、小学校のうちからさせておきたいですね。

向後　中学校の視点から考えると、小学校の実態や、小学校で扱う英語の目標や内容を把握し、円滑な接続を目指す必要があると考えています。例えば、小学校での「読む」「書く」は、中学校と同じものではありません。それを理解するには、小学校の英語の授業を継続的に見て、子どもたちの様子を知っておかなければなりませんよね。年に数回の研究協議会だけでは、なかなか実態はつかめないものです。中学校区単位で、小学校と中学校が授業の映像を交換し、各校種の視点からフィードバックをし合うプロジェクトを実施している自治体があります。これなら出張をしなくても継続的に互いの授業や児童生徒の様子をつかむことができます。

小学校での様子がわかると、中学校1年の入学直後の授業で、生徒の英語に対する気持ちをぐっと引き寄せることができます。その際、小学校で扱った題材や言語材料を、少しレベルを高めて同じ活動をするなど「リサイクル」して用いる工夫が必要になります。特に中学校初期段階ではその頻度を高めて取り上げると、生徒は英語学習への自信を持てると思います。「これ、小学校でやったよ!」と生徒が言うぐらいで良いと思います。

中嶋　そうですね。接続が上手くいっているところは、中学校の先生が小学校へ行って、どんなことを学んでいるか実際に見ています。そして中学校に戻って「意味付け」しながら授業を展開しています。小学生は“ What time is it now ? ”は1語だと思っているわけです。それを中学校で、どの言葉に、どのような意味があるかを初めて学ぶわけです。それが「意味付け」です。その時に「小学校でこんな表現をやったよね」「こんなチャンツがあったでしょう」と、思い出させ「今日はその続きなんだよ」と導入することができますね。

向後秀明先生

向後　そういうことができる先生がもっと増えていくといいですよね！

中嶋　小中の両方で勤務したことがあるからわかるのですが、大まかに言って、小学校と中学校とでは、先生の立ち位置というか、持ち味が違うように思います。

小学校の先生は1日中、子どもたちと一緒にいるので、変化を見取る観察眼が鋭く、教科と教科をつなぐアイデアが豊富でフットワークも軽い。けれど、テストを自分で作らないので、単元が終わった時にどんな力を身に付けたかを想定する力が弱い。だから、ゴールから逆算して単元構成をするのが苦手な人が多いように思います。

一方、中学校の先生は単元を俯瞰して見る力や、ゴール設定力は高いです。しかし、教科書を先に進めることに関心が向かい、表現活動をする時間を十分にとっていないように思います。また、早く終わった子どもたちを待たせ、苦手な生徒の指導に必要以上の時間を割いているようです。だから、課題や授業内容がどうしても浅くなってしまいます。生徒一人ひとりを丁寧に見るなら、上位層をもっと伸ばさなければなりません。授業がワクワクしなければ生活指導の回数が増え、ストレスもたまります。

英語における小中の接続、連携といった時に、中学校は小学校のきめ細やかさを、小学校は中学校のゴール設定力をいかに「盗めるか」がポイントになるでしょう。まずは中学校区の先生がチームになるために、仲良くなることがベースでしょうね。○○小の、○○中の、と言ったら先生の名前を5人ぐらい、パッと思い浮かべられるぐらいに。

その上でチームの一体感を作っていく。同じ中学校区内の複数の小学校でシラバスを統一して作るというのがお勧めです。そうすれば中学校に入る時に「何ができるようになるか」が明確になるし、それに向けてスキルも伸ばしていけます。

ある中学校では Cutout Picture といって、スケッチブックに写真を貼ったり、イラストを描いたりして、それを元にプレゼンテーションをする活動をしています。だから、生徒たちは皆、堂々と発表ができますし、聞いている生徒も Any Questions? と尋ねられると、絵を見ながら質問をすることもできます。実は、この中学校区内の小学校では統一した英語のシラバスを作っているんです。中学校の Cutout Picture の活動をビデオに録画し、小学校でそれを見てゴールを共有しています。すると、どの小学校でも「何ができるようになればいいのか」というイメージを持つことができます。だから、中学校に入学した時には、どの生徒もプレゼンテーション力の下地ができているわけです。シラバスは小学校、中学校の先生方が協働で作っています。これからは、小学校の英語は「評価」も必要になりますから、中学校の先生の知見を活かして、話し合い、共に校区の子どもを育てるという発想で取り組むことが大切ですね。

教育委員会としても小中の接続は気になる点だと思います。教育委員会が核になり、時間を捻出して、小中で共同作業ができるような研修機会を増やし、ワンチームとして機能させることが大切でしょうね。ただし、性急に進めるのではなく、緻密に、見通しを持って進めていただきたいですね。児童生徒の実態も多様ですし、先生の指導力にも違いがありますから。一律に「これをやってください」と押し付けるのでは「理想はわかるけれど、実際には動けない。無理」となってしまいます。計画やシラバスに少し幅を持たせて、先生の個性も認めながら作り上げていけるといいですね。

中学校ではバランスのとれた言語活動を目指す

――小学校で教科として英語を学んできた子どもが中学校に入学するという新たな状況が生まれる中、今後の中学校英語において、何が授業改善のポイントになるでしょうか。

向後　これからの中学校の英語の先生方に求められるのは、英語の運用能力面で多様さを持った子どもたちに対応できる言語活動を組み立てる力です。能力の高い生徒だけが参加できる言語活動になってしまったり、反対に全員が退屈してしまったりするような簡単すぎる言語活動ばかりにならないよう、バランスの取れた言語活動を考えていく必要があります。

中嶋　生徒一人ひとりの様子を見る観察眼と、適切に評価できる力が必要だと思います。それは、先生の頭の中に言語習得の指導プロセスが見えていて、つまずいている生徒に「ここを、こうすればできるようになるよ」と、具体的に指導できる力、とも言えるでしょう。教師の伝え方で本当に届いているかを確認するには、その生徒に言わせたり、書かせたりして言語化させて、初めて可能になります。そのような生徒の心情的な部分、内省的な部分を大切にした確認が「やり取り」だと考えています。ハイスピードで即興的に話すだけが、今回の改訂で挙げられた「やり取り」の趣旨ではないはずです。大事なのは言葉の内言化です。

向後　「主体的・対話的で深い学び」の表層的な部分のみを拾い上げて言語活動を組んでいくだけでは、資質・能力は身に付かないと思います。中嶋先生が御指摘のように、内発的動機づけを高めることが大切です。仮に、生徒の産出した英語が不十分であっても、本人が「産出したい、産出しよう」という気持ちの育成が、「主体的・対話的で深い学び」の根本なのです。「どのような発信をさせたいか」「どうしたら生徒が発信したい気持ちになれるか」を、中学校の先生方には考えて欲しいと思います。

その意味で、場面設定は重要です。新学習指導要領では「日常的な話題」や「社会的な話題」を扱うことが示されています。その際、「社会的な話題」であっても生徒たちの想像からかけ離れたものではなく、より身近なものを取り上げるなど、注意が必要になります。

中嶋洋一先生

中嶋　そうなんです。生徒は自分たちが実感していることや、経験してきたことなら話せます。それを外国語でするわけですから、テーマや課題については十分配慮したいですね。

生徒が主体的になるためには「はい、これをやって」と指示するのではなく、「これには、こういう意味があり、最後にはこのようなことができるようになるよ」といった道筋を見せて

おくようにするといいでしょう。生徒たちは「なるほど、これからやる活動は、こんな意味があるんだな」とわかって取り組むし、振り返りでは「ああ、ここがちょっとわからなかった、家でもやろうかな」と感じたりします。これが「メタ認知能力」です。生徒が納得感を持てるような活動を仕組んでやることで、生徒の主体性が育つと思います。

向後　ペアワークやグループワークをやること自体はゴールにはなりませんからね。生徒は活発に発話しているけれども、実は英語力の面では質的な向上が停滞しているケースも少なくないのです。中学校の先生方は、1年間で生徒の言語的な質がどこまで向上したかをチェックし、サポートしていく力を高める必要があるでしょう。

新学習指導要領解説の「第1章総説 2外国語科改訂の趣旨と要点（2）改訂の要点 ①目標の改善」に、「外国語の学習においては、語彙や文法等の個別の知識がどれだけ身に付いたかに主眼が置かれるのではなく（中略）」とあります。これはかなり思い切った表現ですが、単語や文法の知識量のみを学習のゴールにすることが本意ではない、あくまでもコミュニケーションの中で活用することで新たな知識や技能が獲得され、学習が深まっていくプロセスを重視する、と読み取ることができます。

論証スタイルなら中学生もディベートできる

中嶋　活動あって指導なし、は避けたいですよね。「深い学び」にしても、深さって何だろう?と我々自身が考えないといけないですね。生徒の心の中に葛藤が生まれ、仲間と関わり、違う意見が出されて、思わず自分の考えや立ち位置を振り返って「そうか!」「なるほど」という気づきが生まれるような「深い内容」にしたいですね。

向後　海外の語学の教科書には、日本の英語教科書で扱っているような歴史や人物伝はあまり出てきません。テーマとしては重要ですが、どうしても言語的に重たいものになりがちです。言語活動を組み立てていく時は、生徒の日常生活に寄せ、彼らの関心を掘り起こしていくことがポイントになると思います。

中嶋　子どもが日常的に実感できる内容であることが必要ですよね。ディベートの論題だったら「脳死は是か非か」は中学生には重た過ぎますし、単語の意味を調べるだけで終わってしまいます。それよりも「夏休みと冬休み、中学生にとって良いのはどちらか」といったような身近で実体験もしている論題の方がいいと思います。

向後　価値観に基づくディベートは浅い議論になりがちですよね。「AとBのどちらが良いか」といったディベートをさせた時に、“A is more beautiful than B.”（AはBよりも美しい）といった自分の価値体系に基づいた意見だけでは深まらない。「A には○○という事実があるので、Bよりも優れている」といった論証スタイルの議論に結び付けたいです。

中嶋　「事実（Fact）」に着目させながら発話させるといいと思います。「バナナとリンゴはどちらが中学生にとって良い果物か」というテーマで、「バナナはおいしい」というのは、単なる個人的な意見です。「バナナは熱帯産の果実だから、それを食べると体温を下げる効果がある。だから、スポーツの後に食べると効果が上がる」と言えれば、それは説得力がある事実です。是非、中学校では、このような点に着目して、身近な話題でいいですから、言語活動の質を上げる活動を展開して欲しいですね。たとえば「大阪から東京へ行くのに、新幹線と飛行機とどちらが有益か」というテーマだったら、クラスは大いに盛り上がりますよ。運賃や安全性、娯楽や時間などいろいろなfactが見つかりますからね。両方のメリットとデメリットについてクラスで話し合うようにすれば、多くの生徒がロジックを意識するようになりますよ。

向後　思考力・表現力・判断力等の育成は、国語科を要としながら、他の教科等も含めて言語活動の充実を通して実現していくものです。英語科ばかりでなく、学校全体の活動の中でも意識したい部分です。

――新学習指導要領全体の理念を見据えての、授業改善が必要とのお話だったと思います。最後に、令和2年度を迎えるにあたり、現場へのエールをお願いします。

中嶋　先日訪れた学校で、南アフリカ出身のALTと出会いました。ちょうどラグビーワールドカップの最中で、授業中に南アフリカのことやラグビーのことを熱く語っていたのです。子どもたちはそのメッセージを受け止めて、決勝戦で南アフリカが優勝した翌日、ALTのもとに駆け寄って「やったね!」と喜び合っていました。

その光景を見て思ったのは、ALTを学校の人気者にしないといけないな、ということです。これからの授業は、さまざまな教員が一緒になって作っていく時代です。大学で数学を学んだALTと数学の先生が会話するのもいいし、音楽好きのALTがお昼の放送でDJをやってもらうのも有りです。それぞれの持つバックグラウンドを十分に活用し、それが生かせる接点を発見していくことが、子どもたちの英語学習への内発的動機付けを高めると期待しています。

向後　先生方自身がもっともっと、コミュニケーションを楽しんで欲しいですね。英語の先生方が、ALTを始め、いろいろな先生とコミュニケーションをしている様子そのものが、生徒たちにとってロールモデルになると思います。

もうひとつ、英語ができることで視野が広まり、できることの可能性が広がることを、子どもたちに示して欲しいです。そのためにも、英語を教える先生自身が海外に出てみる、あるいは国内でいろいろな人と交流しネットワークを広げていくなど、自らがグローバル化する経験を積み重ねていってください。